



職名と印象

それは北海道の短い秋の一日。日本分析化学会の年會会場に向かい私は遠方からニコニコと笑顔で声をかけてくださる方を見つけました。それが前走者、資生堂の本山先生でした。本山先生とは質量分析学会で一緒にさせていただいており、無類の分析好きであることは存じ上げております。そんな先生に由緒ある“ぶんせき”印のリレーエッセイ走者にご指名いただいたからには断る理由もなく、「私で良ければ」の一言でバトンを引き継がせていただきました。

何について紹介しようかと頭を巡らすこと1ヶ月。先日「ママの仕事を友達に説明するのが大変なんだよ」と言った娘の言葉からヒントを得てタイトルが出来上がりました。私は、北海道大学において各種機器分析を受託する機関の技術職員です。最近では出張も多く、その度にご当地みやげ片手に帰ってくる母の職業は子供達にとって不可解なものであり、はてなマークがつくようです。「技術職員って何？ 大学で教えてるの？ 先生？ 研究してるの？」と矢継ぎ早に質問をする子供達からすると、職名から仕事内容を想像するのは難しいのですね。大学で働く人のイメージは、テレビ番組に出てくるような教授や先生と呼ばれる方々なのでしょう。この手の質問に私は、「ちょっと違うけど、そんな感じ」などという分析者にはあるまじき回答をしたくなるのですが、何とも具合が悪くて仕方ありません。どこかに「技術職員〇〇！」などというドラマはないかしら。そんな風に考えてしまいます。子供達の理解の中では「先生ではないけれども、学生さんたちの研究の手伝いをしていて、大きな機械を操作している人」というのが母の印象なのでしょう（時折ドラマに登場する装置を例に挙げて、大きな機械を使うというところまではインプットできました）。はてなマークが頭の上に飛んでいる末娘を前にして、もう少し理解できるようになったら職場訪問においでよと思いつつ言葉を濁す母でした。昔は技官といったこの職名。「技」という言葉のイメージも小学生にとってはどんな感じになるかと、ふと考えることがあります。もしかすると、一輪車や縄跳びの得意な上級生が繰り広げる大技を見て、「技」ってすごいことだと思っているかもしれませんね。

さて、読者の皆様にとりまして、この技術職員という職名の印象はどのようなもののでしょうか。この場を借りて私の職場、創成研究機構グローバルファシリティセンター（GFC）機器分析受託部門の日常をご案内しながら機器分析に携わる「技術職員」の仕事を少しだけ紹介させていただきます。

機器分析受託部門は受託分析専門の技術職員集団であ

り、大学内外から毎日届けられる試料の機器分析を行っています。私共の一日は分析装置のご機嫌伺いから始まり、毎朝「今日の調子はどうだい？」と声をかけながらご機嫌をとるお茶目な職員の姿も。装置に最大の力を発揮してもらうためには日常メンテナンスも欠かせません。また、受託といっても、ただ黙って試料を預かっただけでは最良の分析を行うことはできませんので、分析前のメール打ち合わせ、来室いただいでディスカッションも適宜行いながら依頼を受け付けていきます。あまり嬉しくはないのですが、結果だけをご所望で分析法をほとんどご存知ない方が依頼してこられた際には、相手の理解度に合わせた説明を加えます。ここでは技術者として知識のみならず対話力も試され、まさに分析の“先生”となって依頼者教育を行う立場になります。装置の管理メンテナンスを行いつつ、時に先生にもなる、そんな技術職員の姿がここにあります。続いて、依頼内容に基づき実際の分析作業を行っていくのですが、ここは技の見せ所。私の担当する質量分析では、基本的にイオン化法の選択を依頼者に行っていただきますが、化合物特性とイオン化法のマッチングは中々難しいものもあり、明らかに選択間違いということがまま起こります。そのような時には、技術職員が経験と知識を生かしてイオン化法の変更を提案します。提案できるような技量を得るために、学会やセミナーなど各種勉強会への参加、日常的な小実験を繰り返すことも仕事の 일환として行います。

時にオペレーターであり、ある時は先生であり、またある時は実験者にもなる。変幻自在な職業が大学における「技術職員」かもしれません。

こう並べ立てて考えると、子供達の質問「大学で教えてるの？ 先生？ 研究してるの？」に対する答えはすべて「当たり前」で良いかもしれませんね。

間も無く我が家の子供達も大学の門を叩く時期がきます。どんな技術職員に出会うのか、その時、母の姿をどう思うのか、それもまた楽しみです。

次の走者は北見工業大学機器分析センターの松田さんがお引き受けくださいました。松田さんの上司である大津先生とは分析センター繋がりでお世話になっており、大津先生からのご紹介でもあります。松田さん、北海道大学創成研究機構GFCが毎年開催する技術交流会にも積極的に参加してくださり、ありがとうございます。次号のエッセイを楽しみにしております。

〔北海道大学創成研究機構 GFC 岡 征子〕